神戸っ子放談

世界につながる神戸

直木太一郎

「戦前の神戸は、大連、上海、仁川といった、大陸の門戸とはとなりづきあいだったし、東海道線の終点ということなどもあって、世界につながる都市としてその地位が非常に重視されていて、大阪よりもむしろ神戸の方にウエイトが多くかかっていた程なんです」

と現在の神戸の地位、軽視をなげかれるような口調で話をされる。

兵庫の直木家といえば知らぬもののない生粋の神戸っ子。郷土を愛することはだれにもひけをとらないと思われるような熱心さで神戸を語って下さいました。

兵庫の廻米問屋

明治以前からある廻米問屋の植木家からのれんを分け

てもらって、直木を名乗るようになったんですよ。
番頭が二人同じ姓をもらってね、植という字から直木という姓を作ったんだそうで、この頃にはそんなことが流行ったらしいんです。
京都の柏原家からのれんを分けてもらって白木姓ができるというようなぐあいなんだ。
小学校は入江小学校、当時はこの学校は進歩的な学校として有名でした。リンカーンの〝彼も人なり我も人〟という言葉を校風の象徴としてかかげていたんですからなんとなく自由を尊重する気風があったように思いますね。
入江小学校の出身の芸術家といえば、川西英、有馬大五郎、一柳信次、竹中郁と沢山いますが、校風とあわせて見て面白いと思います。
中学は二中で厳しいスパルタ式教育だったものだからあまりいい印象は残っていません。
二中が厳しかったものですから、なおさら入江小学校の校風のよさが感じられたのかも知れませんね。

大陸で修業

戦前の兵庫人は、非常に旧い反面、新らしい感覚とスケールの大きさをもっていたようです。
日露戦役後には、どんどん満洲に進出していったし、日韓会談後はまた、朝鮮へも、台湾は一手に引受けるし支那にも進出するという、めざましさで、活気に満ちていたものです。
だから、大連、仁川、上海、台北などは隣の町に行くような気軽さで、修業に出ていったものです。
米穀商としてみても、仁川からは米を輸入し、大連から大豆、豆粕、台湾からは米というように非常に交易が盛んだったんですよ。
台湾などでは、南京米では駄目だというので、内地種をもってゆき普及させ、蓬萊米として生産され出す。
というように、対外的にも重要な役割を果していました自然、大陸との海上交通も頻繁で各社とも定期航路をひらいて、これまた船舶会社のドル箱でもあったのです
勿論どの銀行、商社でも第一級の人を配して国際的な交流に備えていたもので、
当時の神戸経済の位置は世界に直接つながる町として重要視されていたんです。
これは当時の神戸財界にも良い影響を与えていて、いながらにして中心との交渉がもてるし、交際も洗錬されてくるし非常に恵まれた環境だったといえますね。

神戸の発展に寄せて

戦後、神戸の経済界が不振であるというのは、戦前のアジア大陸との交流が絶断された為だとはっきりいえます。そこでこれに変るものとして、阪神ポート・オーソリテイということが浮び上ってきているので、当然なりゆきだと思います。これには、関西財界をあげて協力一致してことにあたる計画です。
ただこれからの神戸の発展について心配しているのは戦前のように必ず集まっていた第一級の人達が現在では集まらなくなっていることです。
これからの神戸の財界人は逆に積極的に現在の中心的な存在である東京、大阪に進出して直接交渉をもたなければならないと思いますね。
経済同友会では、この点広範囲な交渉がもてるような組織で積極的に動いていますよ。
神戸の商工会議所あたりでも充分に注意して中央と交流をもつようにすすめたいですね。
ロータリークラブには昭和七年にはいって現在まで続けています。一九五七～五八の間、国際ロータリーの役員として三六五区近畿、四国ガバナーを勤め、現在もパスト・ガバナーとしていろいろお世話させていただいています。

経済同友会代表幹事　神港倉庫KK取締役社長
（文責小泉康夫）

Fur
Ueda
毛皮の店
ウエダ
元町2丁目・TEL③0686

秋
秋の風物をいきゝとさせる
あなた。
そして
タサキのパール
田崎真珠
直売所・三宮駅前新聞会館秀品店TEL(2)5646
本社・神戸市葺合区旗塚通り6丁目9 TEL(2)4859
5626
養殖場・長崎・熊本・佐賀・島根（支店）東京

オシャレをたのしむ帽子の店

マキシン

トア・ロード TEL③6711～3

サノヘ

元町2丁目 TEL ③ 2996

夏から秋へ

梁　雅子

春（うす）ずける彼岸秋日に狐ばな赤々そまれり
ここはどこの道（利玄）

このような風景に私は出会ってはっとして立止ったことがある。秋深い野を歩んでいて、細い道を曲った途端秋草の乱れ繁った堤のひとところに、真赤に燃えたつ彼岸花のひと群を見たのである。森閑とした真昼、叢にはかすかにこほろぎが鳴いている。冷たい炎が燃えているような花のひとかたまりを眺めながら私は妖しい不気味さと昂りを感じていた。大歌人木下利玄は、「曼珠沙華」十首一聯で妖気の漂よう美しい歌を作っている。

曼珠沙華毒々しき赤の万燈を草葉の影より
ささげているも（利玄）
曼珠沙華叢の中ゆ千も万も咲き彼岸仏の供養を
するか（利玄）
曼珠沙華は彼岸花とも、狐ばなとも、死人（しびと）花ともいう。

町を近みくたびれ歩む道端にさいなみ捨ててある曼珠沙華の花（利玄）

曼珠沙華は苛まれるのがよく似合う。細かく千切って捨ててある花や葉はなまなましく、何か花の無残な肉体を感じさせるようでふと怖ろしく、その怖さには私はうっとりするのである。

季節の中で最も絶望的な無残なものを感じるのは夏の終りである。猛々しく伸び切った夏草は疲れ、いただきに黝んだ花穂付けて昼すぎの熱風に揺れている風景や、都会では、もうどこへも行きようのない残暑の中で、耳鳴りに似て果てしない車の疾走音が続き、砕け落ちる一歩手前でとどまっているように、私の心の視野の中で高層ビルが幾分か傾き、何か、針金のようなものがねぢ曲り、ただぞろぞろ人々が歩んでいる真昼、激しい交通がふと疎らになる一瞬など、どこかで、何かの歪みが生じているのではないか、と私は思う。そんな季節、鉄筋の建物の塀の中に、ひっそりと咲いている挾竹桃の花が私

をひきつける。黒っぽい葉を背景に、紅色の花のとり合せは泥くさくて誰もつくづく眺めたりはしないけれど、一枝切って部屋に飾れば意外に美しく、花は捨てがたい香りさえ持っている。強い生命力を持ちながら、誰にも認められず埃を被って咲いている挾竹桃に私は情がかかるのである。——向日葵、カンナ、のうぜんかつら、私の好む夏花は、いづれも眩しい陽光の中で、強烈な色彩と個性を持つのだが、烈日の許、それらを見ていると、毒々しければ毒々しい程、私はある寂しさに襲われる。

力弱きならば忘られむ炎天に咲く向日葵は
花粉吐きつつ

真夏日の燃ゆるがに咲くカンナばな朱のはなびらよ
触れて冷たし

足の裏に畳の冷えが感じられる秋に入ると花々は、淡々として、線になり、影になり、人々がやっと自己をとり戻す眼に、一輪の桔梗、一本の女郎花、ひとむらの萩となって、澄み切った気層の中にくっきりと浮き上る。

なほ奥にまだ吾れありと思うなり揺れやまぬかも
風の白萩

ひと夜さにいろどり脱けて暁方は白き桔梗となりて揺れいる

秋こそ清流に棲む小魚のような日本人の季節である。そして秋の花々こそ、畳の部屋のどこに飾っても、いかにもよく調和する美しさを持っている。一輪の桔梗に野草を配した壺を書院の明り障子に飾るとき、いにしへの墨の香が匂ってくるように日本人の血を感じる。そして真赤な曼珠沙華は、幼い頃聞いた地獄、極楽のある冥土を描かせるのである。

梁雅子さんのこと

歌人。養老院に題材をとった長編「悲田院」で第十一回女流文学者賞を受ける。大正五年大阪生まれ、樟陰女専中退。一男一女の母親

ブラックタイツ

黒木ひかる

（写真はブラックタイツで踊るシド・シャリース）

〝ブラック・タイツ〟期待に期待を持ってみた映画だったが、一息に見終った時ただただ余りの素晴らしさに、そのボリユウムに圧倒されて誰れもが何の言葉もなく帰途についた。何か適切な言葉を見つけて口に出したいと胸の中がモヤモヤするのだが、ついに見つけることができないままに…。

〝良かった〟とか、何とか月並な言葉ではとても表現できない感激というのでしようか…。

ジシ・ジャンメール、シド・シャリース、ローラン・プチ、モイラ・シアラーなど世界第一級品の踊手が七〇ミリの画面せましと踊りに踊る素晴らしさ—〝ウーン〟とうなりたくなってしまう。

第一話の〝ダイヤを食べる女〟のジャン・メールもさることながら男性舞踊手ディルク・サンダースの素的なこと。ただ最後のキャベツの中にこそ真の幸せがあるという意味が習慣の違いからか一寸判りにくかった。

第二話でのシド・シャリースのコミカルな味…。演技力充分で、いかに演技力が踊りに大切であるかということをまたまた思い知らされたようだった。

衣裳といい、装置といい勿論これも一流のアーティストが手がけただけあって全部を通してニクイほど単的に総てを表現していました。衣裳装置が単的であればあるほど踊りが引きたつように思えました—もちろん踊手が充分上手でなければならないけれど〝シラノ〟では何よりもプチの振りつけにビックリ感心してしまう。

何の台詞もなく、あのバルコニーの場面をあれだけ見せ切った、そして最後のシラノの死まで何と素晴らしい表現法かとプチのエラさに頭が下りました。

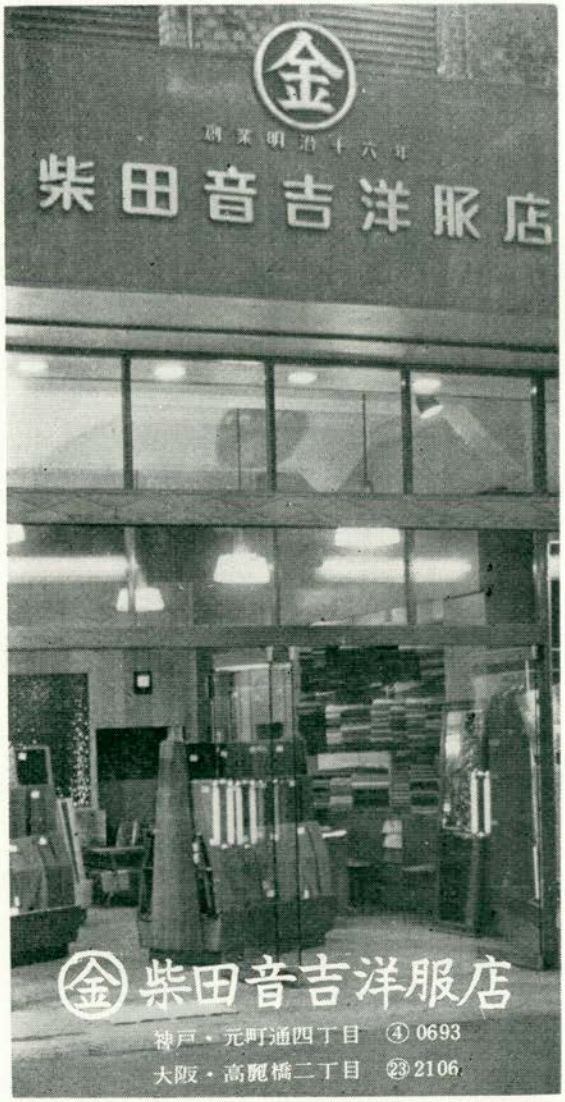
振りつけの素晴らしさでは以前チューダーの〝ライラック・ガーデン〟をみた時も胸が苦しくなるほど感激したものだが、久し振りにその気持を味わった感じ…。

最後の〝カルメン〟ももちろん装置の斬新さ、プチとジャン・メールの息の合った素晴らしさ、ことに最後の殺しの場が素晴らしかった。足だけのために生まれてきたような美しく、ボリユウムのあるジャンメールの足。それにこれもプチのアイディアでしようかエスカミリオのキャラクターの置き方が、とても面白く、ただ一つ惜しむらくはジャンメールが髪形を第一話と変えて欲しかったと思いました。踊る以前の扮装も一つの技術ではないでしようか…。

ナレーターのような役で出演したシュヴァリエも何とシャレたよい味を持っていることか—シュヴァリエをあいう役に使ったことでこの映画にもう一つ格を加えたような、面白味が加ったような気がしましたが…。

何しろ幾度見直しても、見るほどにその素晴らしさが大きくなって行くような映画でした。

（宝塚・舞踊専科）



きものさろん　西　店
服　飾　細　貨　東　店
きものと細貨　新橋店

神戸
東京

おんがら屋

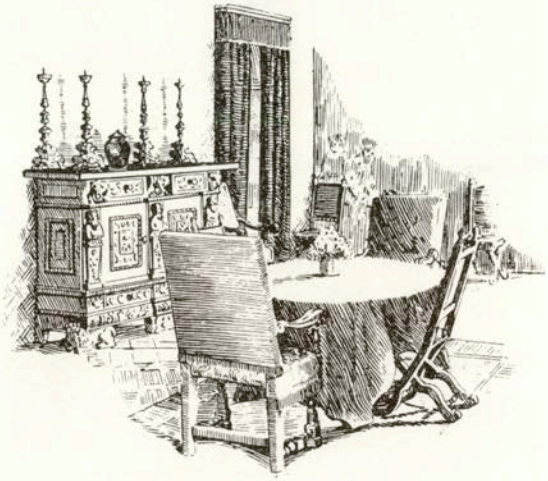
神戸・西　宮　TEL ③8836
　　東　店　　③0629
東京・新橋店　(571)0807

呉服陳列

みよしや

神戸　大丸前
電話神戸(3)三三八八九番
大阪店　阪神百貨店三階
電話大阪(36)五五四八
やまとやしき百貨店三階
姫路店　電話姫路四〇〇〇

家具・室内装飾・工芸品

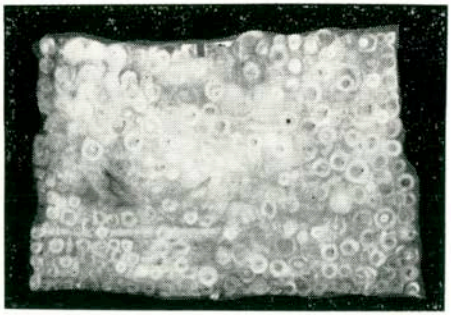


永田良介商店

大丸前　TEL ③1290 ③5520

レリーフ

日本画の田中竜児さん



「城　門」

神戸の日本画壇で、これからの人だと推せる人はきわめて少ない。

その点、三十余歳の田中さんはやはりホープであるし、田中さんの後に続く若手にこれという人が見当たらないのは、画壇全体がソシリを受けても仕様のないことではないだろうか。大局的な見地からしても、日本画家は、日本画という世界を何か特殊な地帯のように勘違いしているのではないかと思われるほど、枯息な世界に安住している。このスピード時代にしかも油絵や彫刻、版画といった美術の分野では日本も世界一流に伍して活躍している今日、古くさい伝統とかいうカラに閉じこもったままでおれるかどうか、強く反省がのぞまれるところだ。

ところで、田中さんだが、現在の日本画の分野で最も活発な京都のパンリアルの出身。神戸へ居を構えた数年？前ごろはシュール（超現実）がかった傾向のおもしろい作品を時々発表していたが、最近はより抽象味を加えて、なかなか幻想感に富んだ作品をものしている。何か原始の世界へ返ったような素朴な題材と取っ組んで、人間の心の奥底にひそんでいる根源的な〝美感覚〟をゆさぶっているかのようである。そういう仕事を共感しあえる仲間が神戸に見当たらないように見受けられるのは残念だが、そんなことにかかわらず、田中さんには〝わが道を往〟ってもらい、そこにあるものをさらに深めてほしいものである。

（伊藤誠）

花時計

〝事件記者〟と酒

松井高男

「テレビの〝事件記者〟をみていると、新聞記者ってのは、よく飲むんだねェ」と、感にたえたようにいった人がいた。むろん新聞記者も人の子、飲むのもいれば、飲まないのもいるわけだ。いつだったか永井智雄にあったとき「あれは世間さまの誤解を招く」と笑ったが、さすがに飲みっぷりはうまく、それになにより酔ってクダを巻くのが出て来ないのはいいねと妙なところで妥協してしまった台風のなかをずぶぬれになって駆け回った社会部記者が、出稿したあと一息ついてグッとあけるビールには万感がこもろうし、デスクにどやされたあとのホップはひとしおほろにがい。作家や画家たちと飲みながら芸術論をぶつ若い学芸記者の情熱は、アルコールでいそうかっき立てられもしよう。同じ新聞記者でも飲み方はさまざま永井大人にあったあと社へ帰って「新聞記者は品行方正で〝事件記者〟のようには飲まないよといっておいた」といったら、変なところに興味をもつのがいて「いったいあの連中は何級酒を飲んでるんでしょうね」という「永井大人の話だと一級酒といったところだそうだ」といったら「どの新聞社の連中もそんな上等なのは飲まんですよ。チュウとはいかないまでもそれに近いのをやってますよ。毎日のことですからね」という。これでは単に〝質〟の誤解をとくだけで、飲まないという弁明にはならない。ともあれ、李白の五言詞とほど遠く、あわただしい明け暮れ、ブラウン管のなかと現実の差はあっても〝飲む〟ことへの共感は、役者も記者も同じとみえる。

（神戸新聞学芸部長）

大丸前

永田良介商店

家具・室内装飾・工芸品

生田区三宮町三丁目大丸前にある永田良介商店は、九十年という古い歴史と伝統を誇る欧風家具専門店―洋家具の店として神戸では一番古いお店で、いまのご主人永田良一郎さんは四代目。しかも生粋の神戸っ子である。

お客さまもお店の歴史を反映してか三代目というお得意さまはじめ、そうしたお得意さまの紹介という方が多く、いずれもこの店の欧風調を基本としたシックな、落ちついたデザインと、いつまでもくるいのない技術の優秀さを愛する人ばかり。

イス、洋服ダンス、机などの商品は、ご主人を中心に木材工芸科出身の五人の専門デザイナーが、同店独自のデザインを考案、葺合区にある自営の工場で作くられるという。このほか四十坪の店内には、この店ならではのセンスのよい室内装飾品や工芸品が調和よく並べられてあり、私たちの目を楽しませてくれる。なが年のカンで青写真を一目みれば欠点がわかるというお母さん、奥さんはじめデザイナーさんたちが、気さくにそして親切に応待してくれるのも大きな魅力です。「あくまでも欧風調を主体に、時代の流れをとり入れながら独自のカラーを出してます。いまは木目をいかした北欧調が世界的な流行にあるようですが…。フランス、イタリーなどの家具専門誌をとり寄せ勉強しています。家具のお上手な買い方はまず良い材料の品を選ばれることですね。たとえ二つのところを一つになさっても…」とは、ご主人のアドバイスです。

（五十嵐）

（写真は独特のデザインをこらした家具のおかれた店内）

みなさまに最も愛され
最も親しまれている乗用車

62' トヨペットクラウン1900デラックス

兵庫トヨタ自動車株式會社

本　　社	神戸市長田北北町2ノ5	神戸（大代表）⑥5051
尼崎営業所	尼崎市昭和通2ノ76	大阪（代表）㊽9501
西宮営業所	西宮市津門大箇町92	西宮（代表）②6905
姫路営業所	姫路市花田町一本松	姫路（代表）㉓2781
中古車センター	神戸市兵庫区入江通5ノ5	神戸（代表）⑤1236

秋の装い

モデル・岩島道枝（道化座）

秋

けふつくづくと　眺むれば
かなしみの色口にあり。
たれもつらくは　あたらぬを
なぜに心の　かなしめる。
秋月わたる　青木立
葉なみふるひて地にしきぬ。
きみが心の　わかき夢
秋の葉となり　落ちにけむ。

上田敏訳詩集・海潮音より

輸入婦人服地雑貨の店
エスター
ニュートン
トア・ロード (3)一八二八

ハンドバッグ専門の店
シラサ
元町二　(3)〇八二三

宝石直輸入商
タジマ
元町二　(3)〇三八七
二五五三

アクセサリーと工芸品
イクシマヤ
元町一　(3)二四一五～六

装いに夢をのせて
トーレイ洋装店
新聞会館1階(2)二八一八

お部屋の装飾アクセサリー
芸げいむ夢
トア・ロード(3)三三九二

湊川神社にて／カメラ・杉尾友士郎・衣装提供・マキシン・トーレイ洋装店